〔書評・文献紹介〕

神田 愛子 著
『マイモニデスにおける神への道程
――神の知解と人間の生き方の相関性を巡って』
晃洋書房，2024 年，204 + 26 + xii 頁，ISBN9784771037823

志 田　雅 宏

本書は，中世ユダヤ教の思想家マイモニデスの哲学的著作『迷える者の手引き』を扱った著者の博士論文に加筆・修正したものである。著者は「神の本質と属性」,「戒律と人間の自由意志」,「神への道程」を中心的な主題として定め，同著作のユダヤ・アラビア語原典の読解により，マイモニデスの哲学の核心を明らかにすることを試みる。本評では本書の内容を章ごとに概観し，各章に付随するかたちで評言や疑問点を提示する。

序章では『手引き』の特徴やマイモニデスの意図，著者の研究の課題と方法が説明される。著者はマイモニデスの著作を大衆向きの法学書と秘伝的な哲学書に区分する従来の見解を見なおし，『手引き』の意図は，「ユダヤの伝統的な教えと哲学的な学びの間に矛盾を覚える者に対し，広く，秩序だった適切な学びの書を提供することによって，最終的にユダヤ人共同体をより良くすることにあった」（p. 5）と主張する。そして，神を知ること（知解）と人間の生き方との結びつきという論点を考察することを課題とする。また，マイモニデスの法学書や倫理学的著作，引用されているラビ文献にも目配りしつつ，この哲学書全体の理路をたどるという方法が提示される。

序章の後半ではマイモニデスの時代と生涯，同時代のイスラーム思想からの影響およびユダヤ思想史における位置づけ，『手引き』の翻訳史についての説明がなされる。評者はこの点にかんして，中世のヘブライ語訳の事例から「翻訳とは何か」という問題を考えさせられた。ヘブライ語翻訳にさいしてマイモニデスが懸念したのは，ユダヤ・アラビア語で思考する経験のない西欧のユダヤ人社会において誤解が広まることであった。それゆえ，彼自身は逐語訳よりもむしろ意訳を求めた。しかし，南仏の翻訳家シュムエル・イブン・ティッボンは逐語訳という方法を選んだ。彼にとって翻訳とは，ユダヤ・アラビア語のユダヤ思想をでき

るだけそのまま南仏に伝達することであったからである。他方，マイモニデスの意を汲んだのは，ティッボン訳の難解さゆえに新たな翻訳の依頼を受けたハリジであった。後に彼が創り出すことになる中世ヘブライ物語文学の珠玉『タハケモニ』は，アラブ物語文学『マカーマート』の自らのヘブライ語訳に取って代わる作品として構想された。おそらくハリジは『手引き』を訳すにあたっても，ヘブライ語で語ることの創造性に賭けていたのではないか。そしてそれは，日本語でユダヤ思想を語ることができるのかという問題にもかかわってくるはずである。評者は著者が『手引き』を日本語に訳すことを大いに期待しているが，そのさいにティッボンとハリジのどちらをめざすのか，ぜひうかがってみたい。

第一章では『手引き』II: 30 の創造論が検討される。それによると，マイモニデスはヘブライ語聖書の創世記第 1 章の創造物語を解釈するにあたって，アリストテレス主義のムスリムの哲学者と，ラビ・ユダヤ教の教典タルムードにおける聖書釈義を参照しながら，自らの創造論を展開する。その特徴として，時間的な秩序にもとづく創造よりも秩序としての始源の創造という理解を持っている点や，万物とその始源との因果関係を前提としている点が挙げられる。また，創世記のテクストや用語は両義的であり，その理解には文法的な知識が必要とされるだけでなく，人間の創造についてはアリストテレスの自然学における質料と形相の概念が適用されている。そして，これらの知識や概念はユダヤ教の伝統的な聖書釈義を検討しなおすための視座をもたらすものでもある。

しかし，これは本書全体にも言えることだが，著者は『手引き』の特定の章に視点を限定しすぎるきらいがある。『手引き』における創造論の理路をたどると，そもそもマイモニデスは創造を「証明」できるとは考えていない。むしろ彼がめざすのは，世界が創造されたという教えをより確かなものとして打ち立てることである（II: 17）。また，彼は創造論の文脈でアリストテレス主義と新プラトン主義の立場を明確に批判している。世界の永遠性という前提や，一者からの流出という着想は，時間的な創造と神の意志による創造をそれぞれ否定し，「トーラーの基盤の破壊」をもたらすからである（II: 23）。実際，著者が人間の「創造」という主題に関連づけている『手引き』III: 8 や I: 17 の議論は，むしろ個々の人間の生成消滅という「存在」のあり方を主題とする箇所であり，存在論の観点から質料と形相の概念が適用されている。確かにトーラーが語る創造には字義的解釈ではとらえきれない秘義があるとマイモニデスは考えている。また，彼は「創造の業」（マアセ・ベレシート）を自然学の意味で理解している。しかし，前述のふたつのギリシア的な見解は，トーラー自体を無効とする前提に立つがゆえに，創世記の創造物語を字義から離れて解釈することの正当な根拠にはなりえない。これらの学知の役割は，神による創造行為そのものではなく，創造された万物の存在を説明することにとどまるのである。他方，著者が検討している創世記第 1

章の解釈は，むしろ前者（神の創造行為）にかかわる問題である。創造という主題にかんして，マイモニデスはギリシア的な存在論の射程を慎重に定めている。ゆえに，トーラーの伝統とギリシアの学知を調和する彼の試みは，「破壊」をもたらす両者の緊張関係を自覚する仕方で進められたのであり，創造とはその危うい関係が最も顕在化する主題であったといえる。

第二, 三章では属性論が扱われる。第二章ではマイモニデスがキリスト教の三位一体論やイスラーム神学（カラーム）における属性論を批判し，アリストテレスの論理学（主に『範疇論』）に影響を受けて，神についての属性を五つに分類したことが説明される。その特徴のひとつが「否定神学」であり，「神についての否定的叙述を通して神に対する理解を増し加え，神の本質に近づこうとする考え方」（p. 67）である。具体的には，前述の五分類のうちの四つが該当する。第一は「本質的な属性」，すなわちその事物の本質を説明する「定義」である。本質的属性はその事物の存在の原因であるが，神の存在の原因は存在しないため，神についての同属性は否定される。同様に，「部分的定義」，「特性」（本質に付帯する偶然性），「関係」もそれぞれ神の唯一性，神の存在の必然性，神の非身体性に反するために否定される。著者によれば，マイモニデスの否定神学的な属性論は，カラームにおいて前提とされる存在論的な観点そのものに対する批判を含意し，むしろ論理的な命題として属性を論じる新たな方法を提示するものであった。

第三章では神の属性のうち，唯一肯定的に表現される「行為の属性」について，『手引き』I: 53–54 の議論が検討される。マイモニデスはモーセに対する神の啓示の記述（出エジプト記 33 章）を解釈し，人は神の「栄光／顔」（＝本質）を把握することはできないが，神はモーセの求めに応じて「道／好意」を示したと説明する。それは「神の働きを通して神の属性を知らせる」（p. 91）ことを意味し，ラビたちが「ミダー」という語で定めた「13 の属性」として，ユダヤ教のなかで受け継がれてきたものである。「ミダー」とは具体的には神が「憐れみ深い」，「恵み深い」などの形容のことであり，神の「行為」をあらわすとされる。ただし，これらの属性は，神が実際に身体を動かす，あるいは感情にしたがって行動することを意味するのではなく，人間の同様の行為に似たものとして，人間が把握できるものをさす。そして，モーセはこれらの属性を，神に倣って自らが民を統治するために神から示されたのである。

著者の議論は説得的だが，一点小さな疑問がある。著者はマイモニデスが「知識」と「命」を同じ意味でとらえ，「神を知ることは，命を知ることと同義なのである」と述べている（pp. 87–88）が，この点は再考を要するのではないか。むしろ，ここでの論点は，著者がその直後に述べている，知性的に認識する主体と認識される対象の関係性である。もしその関係が成立するなら，人間が神を知るとき，主体の本質と対象の本質が同一となるはずであり，その仮定の類例（「～

のように」）として，生きること（人間が生きる＝命という対象の本質と同一となる）が挙げられていると読める。そして，当然ながら神を知ることについてはそのような本質の同一はありえない。つまり，ここでマイモニデスは「命を知ることで神を知る」と主張しているのではなく，人間は神の本質を知りえないという主張を続けているのではないかと思われる。

第四章では戒律論が取り上げられる。戒律とは聖書に記された神の命令であり，ラビ・ユダヤ教では 613 個（当為戒律が 248 個，禁止戒律が 365 個）あるとされる。これらの戒律を分類するにあたって，マイモニデスは「法」（ミシュパティーム）と「法規」（フッキーム）というカテゴリーを導入し，前者はその有益性と目的が明確であるものを，後者はそれらが明確でないものをさすと説明する。その上で，ユダヤ法解釈史において彼が革新的であったのは，従来はその理由がなく神の意志のみによるとされてきた戒律にも，すべて理由があると主張したことである。また，彼の言う「理由」はふたつの意味を持ち，実践者の身体や徳，理性の向上をもたらすという意味（「効果」に近い）と，異教徒の宗教的な慣習との差異化という意味（「歴史的理由」に近い）を持つ。前者は彼の法典『ミシュネー・トーラー』における用法であり，『手引き』では個々の戒律ごとに両者が使い分けられている。また，後者は戒律の不変性の原則との両立の困難さゆえにしばしばその説明が隠されるのに対し，前者は戒律全体の究極的な目的としての「体の完全さ」と「魂の完全さ」に結びつくものとして説明される。

著者の理路は明快だが，戒律の究極的な目的にかんする申命記 6：24 と同 22：7 の引用をめぐる考察（pp. 121–123）には疑問が残る。後者の聖句は「巣からの放逐」（巣に子のいる母鳥を取ってはならない）と呼ばれる戒律で，ラビ・ユダヤ教の法解釈でも最もその理由がわからない戒律のひとつとされてきたものである。この戒律は，バビロニア・タルムード（キドゥシーン 39b）の「死者の復活（来たる世）に依拠していない戒律はひとつもない」という原則が述べられた伝承において釈義の対象となっている。そして，マイモニデスはこの原則が申命記 6: 24「我々がいつも良くあり」にも見出されると論じているのである。彼はこれらふたつの「法規」が共有する原則とは，「魂の完全さ」という究極的な目的を持つことであると理解する。そして，両者の聖句を引用することによって，すべての「法規」に同じ原則があてはまることを主張するのである。つまり，マイモニデスは著者が推察しているような聖書の文脈（十戒との関連性）ではなく，むしろタルムードのラビたちの法解釈の文脈で，戒律（特に「法規」）の理由と目的を探究していると思われる。

第五章では人間の自由意志と神の摂理が扱われる。マイモニデスにとって自由意志の主題はユダヤ法の観点から論じられるべきものであり，具体的には彼の倫理学的著作である『八つの章』において詳述されている。彼は占星術的な発想に

もとづく運命論を明確に否定し，戒律という「命令」は個人の自由意志によってそれを守ることを原則とするものであることを強調する。もし人がその命令を強いられるとしたら，戒律の遵守や違反に対する報酬と罰があるはずがないからである。そして，著者はマイモニデスが自由意志を「人間が複数の選択肢の中から自らの意志で特定の行為を選択する自由」（p. 133）と定義したと説明する。次に，神の摂理について，『手引き』III: 17 における摂理についての諸見解と，それをふまえたマイモニデスのヨブ記解釈（III: 23）が検討される。聖書のヨブ記は義人ヨブの苦難をめぐる物語であるが，マイモニデスは同書の登場人物たちにユダヤ法やアリストテレス，カラームなどの見解をあてはめていく。そして，ヨブ記が「人の知性では神の知性を理解することは不可能である」（p. 138）という見解を結論として示すものであると著者は主張する。その後で，上記の議論をふまえて，この世における出来事と神の意志との関係を論じた『手引き』II: 48 の分析がなされる。そこではある事物の存在が近接的原因によるのであり，その原因の連鎖をたどっていくと最終的に第一原因に到達するという説明がみられる。この着想はアリストテレス的だが，その最終的な原因を神の意志に帰している点が特徴的である。神の意志が摂理として存在する世界のなかで，人間はいわば用意された選択肢のなかから，自らの意志で特定の行為を選ぶのである。

しかし，この著者の考察には疑問がある。第一に，なぜ著者は第 III 部と第 II 部の順番を入れ替えて論じたのか。II: 48 では，神の摂理が個人の行動にまで及ぶという見解は「預言者の言葉」（p. 138）によるものとされる。それをふまえて，マイモニデスは III: 23 でヨブ記におけるエリフがその「預言者」に該当すると解釈するのである。第二に，III: 17 と III: 23 の著者の考察には訳し落としがある。まず，III: 17 では，摂理についての五者の見解のうち，第五の「ユダヤ法を遵守する者の見解」の箇所（pp. 135–136）の最後の一文が訳し落とされている。その一文は「しかし我々はその（神の）判断の諸様式については無知である」というものである。マイモニデスによると，苦難を経験したヨブは友人たちとの議論のなかで，摂理についてのアリストテレス的見解（摂理は個には及ばない）にいたった。それは「無垢な」ヨブが「迷える者」となったことを意味する。その後，彼はエリフの「預言」に導かれてその見解を改めるが，エリフは彼の苦難の理由を明らかにしたのではなく，前述の一文と同じく，神の摂理は人間にはわからないと述べたにすぎない。では，なぜヨブは悔い改めることができたのか。それが III: 23 に記されているが，著者はその部分も訳し落としている。その内容とは，「それ（災い）は彼に愛を増し加えるであろう」というものである。ヨブは「何を」ではなく，「誰に」語られるかによって，その心境を変えることができた。「神の摂理は人間にはわからない」ということが「苦しみ」ではなく「愛」に変わりえたのは，エリフの語る言葉を「預言」として受け入れられたからである。

このように，神の摂理のなかで生きるという主題は第 III 部を中心に展開されている。ゆえに，その細部にあらためて目を向ける必要があると思われる。

第六・七章では『手引き』の結論部分（III: 51–54）の分析を通じて，マイモニデスが示す「神への道程」についての考察がなされる。第六章では彼の有名な「王の館」の譬えが扱われる。この譬えでは，神を信じない者や異端的見解を持つ者だけでなく，ラビ・ユダヤ教の戒律を遵守する民衆や法を定める法学者ですら，「王」（神）の館に入ることはできないと語られる。この挑戦的な譬えをもって彼が示したのは，論理学から自然学，そして形而上学へといたる正しい順序での学知の修得によって知性を高めることの重要性である。それは「知解」（イドラーク）と呼ばれるものであり，この知解にもとづいてユダヤ教の法や儀礼を実践することにより，神を愛することを読者に求めたのである。

著者はこの譬えに通じるラビ伝承として，バビロニア・タルムード（ハギガー 15a）の逸話を分析しているが（pp. 162–163），そこには若干の誤解が見受けられる。引用されている伝承は確かにタンナーイーム時代（1 － 2 世紀）のバライタだが，「さて」以降の部分はタルムードを編集した後代の匿名編集者による付言である。問題は創世記 1 章の世界創造についての探究だが，ベン・ゾマは創造の二日目の出来事（上と下に水が分かれる現象）を，一日目の世界のあり方（神の霊が水の面を漂っている）から探究してしまっている。匿名編集者の付言はそのことを教示しているのである。つまり，この伝承はベン・ゾマが創造の神秘に専心したこと自体ではなく，一日目と二日目の創造の順序を理解せぬままにその主題を探究しようとしたことが問題なのである。だとすれば，マイモニデスはこのタルムードの伝承に，真理にいたるためには正しい順序で学知を修得することが不可欠であるという自身の主張と同じ見解を読み取ったのではないかと思われる。

第七章ではその知解と行動（生き方）の関係性という問題が論じられる。いずれも必要であることは前述の譬えからも明らかであるが，著者によれば，人間の完全性のうち，まずは神を知解することによる理性的徳の獲得をめざすべきであるとマイモニデスは主張する。その後で，神の「行為の属性」に倣う，つまりは神に倣って生きることを実践するのである。知解から神に倣った生き方へという過程こそが彼の提示する「道程」であったとして，著者は論を結ぶ。

結論にかんしては，第三章における神の「行為の属性」についての著者の議論と，第六・七章における考察との関係性を問いなおしたい。第三章では，著者は行為の属性を「学ぶ」側面を強調し，断食や祈りなどの「宗教的行為ではなく，神を知ることによって神により近づくこと」（p. 96）をマイモニデスが示唆していると論じている。他方，第七章ではエレミヤ書の引用をふまえて，知解の「後に，神の行為の属性である，慈愛，審判，公平を求め続ける」（p. 181）とある。

また,「13 の属性」はユダヤ教のタハヌン（嘆願）やスリホート（悔悟）の祈りにも含まれるため，第六章で検討されている祈り（pp. 154–155）とも関係するかもしれない。やはり「行為の属性」は礼拝や悔い改めなどのユダヤ法の主題と密接に結びついているのであろう。だとすると,「行為の属性」を通じてみえてくる「知解」と「生き方」の関係について，第三章と第六・七章のあいだに齟齬はないのかが問われてくる。マイモニデスが第 I 部から第 III 部へと筆を進めていくなかで，両者の関係を相関的なものとして最終的に示したという理解でよいのか。あるいは,『手引き』を俯瞰する視点から見て，マイモニデスがこの相関性を当初から一貫して表明していたのか。『手引き』のなかで彼が自らの見解を変化させていったのか，あるいはそうではないのか。その点をうかがってみたい。

マイモニデスについては日本語読者に対しても近年少しずつ紹介がなされてきている。そのなかで，彼の哲学書を包括的に扱った本書はひときわ大きな輝きを持つ労作といえよう。今後もマイモニデスの著作の翻訳も含めた研究の進展がいっそう望まれる。本書はその「礎石」（エヴェン・ピナー）となるものと確信している。